刊行にあたって

混成アジア映画研究会は、毎年の論集『混成アジア映画研究』（本書）と、国・テーマ別の叢書シリーズ「混成アジア映画の海」を刊行しています。「混成アジア映画の海」の第２巻として、2021年12月に『夢みるインドネシア映画の挑戦』（西芳実著、英明企画編集）を刊行しました。

インドネシアでは、広大な土地に言語も宗教も異なるさまざまな人びとが暮らしていますが、30年以上に及ぶスハルト大統領による強権政治により、国全体の治安と経済開発の優先と引き換えにして個人の自由が制限されてきました。かつて黄金時代を誇っていたインドネシア映画も、1990年代後半には壊滅的な状況を迎えました。

1998年にスハルト大統領が退陣したことで民主化と自由化が進み、インドネシア映画も1998年に制作・公開された『クルドサック』（袋小路）を嚆矢として復活を遂げ、今日の隆盛に至ります。スハルト時代には政権の正当化のために映画が作られたこともありましたが、1998年以降のインドネシアでは、スハルト時代のインドネシア社会がどのようにして袋小路に陥ったのかを、⑴父が子を導くという家族のあり方が国政に投影されたことの是非の再検討、⑵規範に従おうとするあまりに規範の押し付け合いになり、特に女性がそのしわ寄せを受けていたことの解消、⑶過去に国民どうしで敵対しあったために生じてまだ癒えていない社会の傷への手当の３つの点から、インドネシアの人びとが将来への夢を抱き続けながら、その夢を映画を通じて共有することで社会全体で育てようとしてきました。『夢みるインドネシア映画の挑戦』には、そのようなインドネシアの映画を通じた挑戦が描かれています。

映画で虚構と現実が入り混じって物語を生み出し、さらに映画が現実に影響を与えることで、映画と現実の区別はますます曖昧になってきています。ただし、現実は複数のできごとがそれぞれ決着がつかないまま進んでいくのに対し、映画では話を絞って上映時間内に結末が付けられます。映画のような物語の理解に慣れすぎると、現実社会に対しても１つの話に結末が付いたところで一件落着という感覚が生まれるかもしれません。

現実には１つの話に決着がついてもその先に別の話が続いていきます。映画でも、１つの作品の中に複数の物語が織り込まれていることもあります。一見して納得できるわかりやすい物語だけ受け止めるのではなく、わかりにくいと感じる部分の理由を考えてみたり、わかりやすい物語の向こう側にさらにどのような物語がありうるかに考えを巡らせたりすることも、映画の愉しみ方の１つです。

物語上で決着がついているように見えることでも、見方を変えると別の決着が見えてくることもあります。個人が納得する決着の仕方と社会が受け入れる決着の仕方の間に葛藤

が見られることもあります。本論集には映画の結末の向こう側を考える論考を掲載しています。

『夕霧花園』と『不即不離』は、日本軍による占領統治やマラヤ共産党による武装闘争といった戦争の時代を経てマラヤ（マレーシア）が建国されていく過程で肉親を理不尽な形で奪われた人びとの痛みと喪失感を描いています。どちらの映画も、作品の中心となる主人公の物語と別に、もう一人の主人公とも言うべき人たちの物語が織り込まれており、痛みと喪失感の受け止め方の複雑さが示されています。

インドネシア映画の『フォトコピー』は、現代のジャカルタを舞台に、性的ハラスメントの被害を受けた女子学生が情報技術を活用して真相を突き止めるサスペンス映画です。名誉回復と真相究明を求める主人公の闘い方には、共感を覚える人も違和感を覚える人もいることでしょう。主人公の闘い方は、これまでインドネシアで人びとを守るために築き上げられてきた仕組みや規範の有効性が失われつつあることを反映しています。観客は、社会のあり方が大きく変わりつつあり、そのような社会の中に自分もいることを感じさせられて不安を抱くのです。

タイの『バッド・ジーニアス』は、受験戦争が熾烈化するタイで、高校生たちがチームでカンニングすることで学歴社会で生き残って自分が望む人生を手に入れようとする話です。才能、努力、家柄、人柄といった個人の特性を持ち寄って協力するチームものですが、それがカンニングという不正行為に向けてなされているところが特徴です。同じ場に集まった一人ひとりの境遇が大きく異なっているときに公正はどのようにはかれるのかが問われています。登場人物のうち誰に感情移入するかによって作品の見方や評価が変わるかもしれません。

『カム・アンド・ゴー』は、日本を含めたアジア各地から人びとが夢や希望をもって訪れるアジアの国際都市である大阪の人間模様を描いた作品です。国籍や言葉や立場が異なる人々がたまたま知り合って助けたり助けられたりする関係が作られるなかで、日本人だけが助け合いの輪の中から外れている様子が描かれます。

また、本論集では、大陸部東南アジアの５つの国にわたって流れる国際河川であるメコン川に目を向けて、越境する災いについての映像作品を読み解いています。前号に引き続き、メコン川流域５か国の映画監督によるオムニバス作品『メコン2030』を素材とした読み解きを掲載するとともに、東南アジアを舞台にした初のディズニー長編アニメ映画である『ラーヤと龍の王国』を『メコン2030』との関連性から読み解く論考を掲載しています。

今年度は東南アジアの映画関係者の訃報が幾たびか届きました。本論集でも何度か作品を取り上げ、2018年にプノンペンで行った『12人姉妹』の上映・ディスカッションにゲストとして参加してくださった同作品のリー・ブンジム監督が2021年10月に亡くなりました。心よりお悔やみ申し上げます。

混成アジア映画研究会は、東南アジアの映画を対象として、日本語字幕の作成、上映会・シンポジウムの開催、映画と社会に関する記事執筆を行っています。

毎年３月に大阪アジアン映画祭との共催により一般公開シンポジウムを行い、その記録を論集に採録してきました。2021年はオンラインでの開催となり、リム・カーワイ監督をゲストに招いて『カム・アンド・ゴー』をもとにディスカッションを行いました。

毎年７月末には京都でヤスミン・アフマド監督追悼の上映会「わすれな月」を開催しています。2021年は「わすれな月」にあわせて『不即不離』のオンライン上映および『不即不離』と『夕霧花園』についてのディスカッションを行いました。

また、混成アジア映画研究会は、京都大学東南アジア地域研究研究所のビジュアル・ドキュメンタリー・プロジェクト（VDP）にも参加しています。VDPは毎年10月の京都国際映画祭にあわせて短編ドキュメンタリーの上映と長編映画の上映・ディスカッションを行っており、混成アジア映画研究会は長編映画の上映・ディスカッションを担当しています。2021年には、「映画は他者の痛みを語れるか――夢みるインドネシア映画の挑戦」と題して、『楽園への長き道』、『デリサのお祈り』、『ベアトリスの戦争』のオンライン上映およびこの３作品に『アクト・オブ・キリング』、『マルリナの明日』を加えた５作品についてのディスカッションを行いました。

論集『混成アジア映画研究』の冊子体での刊行は今号が最後となりますが、今後は形態を変えて刊行を継続することを検討しています。

ここに挙げたもの以外を含めて、混成アジア映画研究会の活動は研究会Webサイトで紹介していますので、そちらもご覧ください。

この論集に所収の各論考は、京都大学東南アジア地域研究研究所共同利用・共同研究拠点「地域情報資源の共有化と相関型地域研究の推進拠点」の公募共同研究「メコン川流域における生態地域主義の生成と変容」（研究代表者：橋本彩）ならびに科学研究費補助金「東南アジア映画の物語と表現を読み解く――地域研究と映画史研究の連携」（研究課題番号20H01201）による研究成果の一部です。研究会の活動にご理解とご協力を下さっている機関や方々に感謝申し上げます。

京都大学東南アジア地域研究研究所
山本 博之